朝日新聞

# 難民の子ども「他人が怖い」

## 「接触性障害」

### カンボジアで邦人医師調査

## 33人全員が同じ傾向

## 表情硬く強い緊張

【プノンペン＝渡辺正則】タイ国境の難民キャンプからカンボジアに帰った難民の子供たちは、「見知らぬものへの恐れや不安」が強く、対人関係の精神的発達が遅れる「接触性障害」の見られる例が多い。こんな調査結果を、カンボジアで医療ボランティアをしている山形大医学部精神科の桑山紀彦医師がまとめた。調査数はまだ少ないが、三十数万人という難民のほぼ半数を占めるといわれる子供たちの心に、閉ざされたキャンプ生活がもたらした影響の大きさを示すものだ、と同医師は話している。

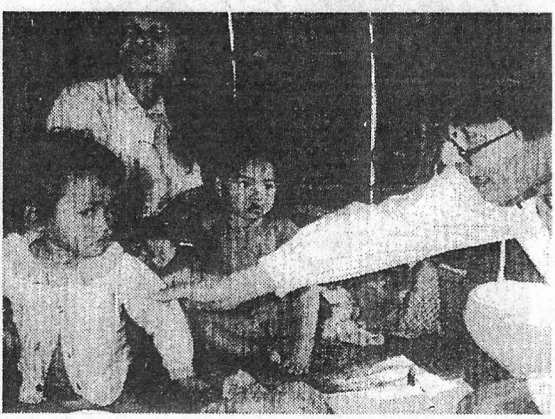
アジア医師連絡協議会（十三カ国、二千人）日本支部所属の桑山医師が調査したのは、カンボジア中部のコンポンスプー州の子供たち。昨年十月から一月末まで、三歳から十三歳までの帰還難民の子供三十三人と、以前から同州に住んでいる子供四十一人を観察。

「活動性」や、医師の話しかけなどに対する「反応」など十三の項目で、行動を点数化してみたところ、帰還難民の子供は全員に「接触性障害」の傾向が見られた、という。

弟(三)にしゃぶらせた自分の指を、今度は自分でしゃぶる女の子(五)。母親はそれを気にも留めない。麻の米袋の糸を二時間にわたってほじくり続けていた十一歳の女の子。話しかけると突然、動きを止め、凍りついたような表情になる。

特に目立ったのが、糸ほじくりを続けるなどの「同一反すう行動」。約六割の子供で見られた。また、①医師が笑いかけた時、約八割は表情を閉ざしたり、体をかたくした②年齢を聞いたり腕に触ったりすると、驚いて立ち尽くすなど緊張する子が七、八歳以上になっても七割はいる、などの傾向があった。

これに対し、もともとその地域で育った子供の場合、「同一反すう行動」はほとんどみられず、医師の働きかけにも、笑いながら逃げたり、はにかんだりの自然な動きをしていた、という。



帰還難民の子供たちの精神状態を調べる桑山医師＝コンポンスプー州で、吉田耕一郎写す

桑山医師は「調査数がまだ少ないことや、一人ひとりの子供の個性の違いを考慮しても、難民の子供には他人との接触を恐れる傾向がはっきりうかがえる。将来のカンボジアの復興を担う子供たちなのに、このままでは精神的成長に深刻な影響を及ぼす」と、キャンプ生活の後遺症を心配する。このため、少なくとも五年間は調査を続け、カンボジアの教育機関などに実態を訴える考えだ。

**接触性障害**　精神的な原因から言葉や態度などの発達が遅れる症状。コミュニケーション障害ともいう。自閉症や知的障害などの子どもに見られる。障害の程度に合った、穏やかな環境のもとで、ゆっくりと療養することが必要とされている。